

白選五十五首



小池 光

こいけ・ひかる 1947年、宮城県生まれ。東北大学理学部卒業。歌集『バルサの翼』（現代歌人協会賞）、『魔駅』、『日々の思い出』、『草の庭』（寺山修司短歌賞）、『静物』（芸術選奨）。エッセイ集に『現代歌まくら』、『茂吉を読む』など。現在、「短歌人」編集人。NHK学園選者、山陽新聞、北国新聞選者。

雪に傘、あはれむやみにあかるくて生きて負ふ苦をわれはうたがふ

とほき日のわが出来事や 紙の上へにふとあたたかく鼻血ひら咲きぬ

バルサの木ゆふべに抱きて帰らむに見知らぬ色の空におびゆる

ひるがほは火傷のやうにひらき出づこの叢くさむらにあなたは笑ふ

いちまいのガーゼのごとき風たちてつつまれやすし傷待まつ胸は

あかがねの月のぼり来て千の家ちのいえに千の赤子の青畳あおじやう這ふ

海わたる丹頂たんていの頭づにみちびきの地磁気影ぢまきかげさす花のごとけむ

フィレンツェの衰弱じやくじやくとともにこの地上去りし光を春といはむか

ジョン・レノン死しにたる朝あした口漱くちぐわが青春は彼とかかはらず

生きてゐるしるしほのかに夜の卓た濡ぬらすサンチャゴの雨あめの糸いとはがき

満月は朴ぼくの葉はにゐて税関吏ぜいかんしアンリ・ルッソーの孤ひとり独ひとり思おもほゆ

『バルサの翼』

『魔駅』

短歌を作つて三十年くらいである。すぐに「短歌人」というところに入つて、年々百首くらい発表してきたから、これで三千首程度。そのほかのところと同じくらい活字になつたと考えると、倍の六千首くらい作つたということだろうか。

そのうち歌集に採録したのは三割から四割程度。

この数は多いのか、少ないのか。多いいつてことはないとおもう。むかしの歌人は、生涯何万首という人がごろごろいるが、今後、平均寿命まで同じペースで作つたつて、そんな数にはならない。

白選歌を最初から選ばなくてはならなくなつて読み直すことを強いられたが、むかしの

たましひのあかるくあれば象印魔法瓶こそ容るるによけれ

たはむれに懐中電灯呑まむとぞする父親を子がみて泣きぬ

ふたふさの缶詰蜜柑のゆる系に冷し中華をわがかなしまむ

「さねさし」の欠け一音のふかさゆる系相模をあをき海原のくに

父十三回忌の膳に箸もちてわれはくふ蓮根及び蓮根の穴を

赤犬煮る鍋のめぐりのもの影をわが望郷と言はばいふべし

はくれんのひかりかはらず父死なば長子は遺骨次子は遺影を

そこに出てるるごはんをたべよといふこゑすゆふべの闇のふかき奥より

あぢさゐのつゆの葉かげに瓦斯ボンベこゑなく立てり家をささへて

生まれきてひめかたつむり角にふる露のひかりのあをき故郷

雨の間のひかりのなかにかなしめる木槿は白き朝鮮のはな

雨の中をおみこし来たり四階の窓をひらけばわれは見てるる

日本語をあやつるときは天皇をつねはらはらとわれらおもへりき

雪虫のとぶころとなりかんばんの赤一文字「灸」ぞ目に沁む

ぎんなんの異臭ただよふ境内にましろき犬をみちびく少女

壺的なうつはより箸にとりあげてほのぼのしろきうどんを啜る

むせかへるばかり赤子のほふ抱き重巡摩耶へきみかへりけむ

やみがたき熱心をもてその妻に三たびとりかぶとの毒を盛る

実印の象牙の文目くもる日にうつつなるべきこゑほととぎす

ひつそりと弓たづさへて少年は電車に居たり青葉にほひす

「日々の思い出」

「草の庭」

作品を読むのは、実につらい。どうにもまずいわけである。どうにもさまにならなくて惱んだ箇所が、まざまざと、なまなまと、思い出される。あらためてじぶんは不幸な性分だと思ふ。楽しかったことはみんな忘れて、いやなこと、苦悩したことだけ、いつまでも忘れない。

歌のスタイルが何度か変わったというふうにいわれるが、本人としてはべつに意識してそうしたことはない。

短歌は形式だから、形式の鎖の下にあって生身の肉体の線はとりあえず露出しない。それがありがたくなって短歌に親しんできたわけだが、いくら鎖の下にあらうとて、まったく生身の線が抹消されるわけではない。とくに、なんのくんのいつてもじぶんのことだから、他人よりじぶんについて、その肉体のラインのありどはよくわかる。あつ、ここにまたカラダの線が、とおもって冷や汗をかくわけである。

「滴滴集」はまだ歌集になつてない。いま原稿を作ろうかという段階で、そのうち日の目をみる。これは二、三首の歌をワンセットにして「主題」のない連作を試みた。

そしてこの歌集も、十年後、二十年後のじぶんがみれば、ああ、まずいまずいと同じ冷や汗をかく。

みちのくを思はむときに菊人形義経のくちに紅差べにさされをり

柿のたねするどく吐きて行きしかば少年はのち蜂須賀小六

象の鼻にくらぐらとほる二本のくだ父と母より受けたるものぞ

初期消火に失敗し油田全体に火がひろがるがごとしなべては

徘徊老人を人工衛星に監視しゆくを「進歩」といふ

死装束しにの展示会といふものがひらかれて少しの人集ふらし

犬ころかはたうちのむすめか夜更けてみんなどこかに行つてしまひたり

相当に大きな鳥が十数羽おしだまり居り道のべの木に

耳もちてぶら下げしとき家兎いへうさぎあはれあはれ葱のごときしづかさ

ブラマンクの洋梨ひとつの絶品がゑはがきの絵にそそりたつなり

魔法瓶しまにいま蔵はれし熱湯は暗黒の中にありしとおもふ

「静物」

なきがらの顔をおほへる日の丸が地中にふかくおろされてゆく

あをびかりしてさくら差す馬房あり近代百年のをはるとき見つ

事務室に続ける印刷室にきてかくれたばこを吸ふのも教師

いま暫し隠れてわれは此処に居むかくれとほして一夏あれな

日曜ひとひの一日しづかにわれは居りふたたびは来ぬ夏雲のまど

鍵盤かきばんにじやらじやらさがる鍵を提げ錆の香かしるき校舎を巡る

ラブホテルのうらの塀より日ひ一日石榴ひじょうじの花はみちにこぼれて

通学路一本裏のみちのべにさはなる花をはぐくむざくろ

「滴滴集」